

サムエル記下 5 章 1～25 節

2025 年 7 月 23 日(水)

はじめに

本日はサムエル記下 5 章 1～25 節を学びます。ここは、ダビデがイスラエルとユダの王になったこと、それに伴いエブス人の町を攻略しダビデの町とし王宮を造ったこと、またペリシテ人と二度戦い、彼らを破ったことがいわれています。

ところで聖書は、この 5 章でダビデがイスラエルとユダ全土の王になったことを語っていますが、さらに 6 章を見ると、「神の契約の箱」をエルサレムに担ぎ上げたことを語っています。また 7 章では、預言者ナタンをとおして神とダビデが契約を結んだことを語っています。ですから世俗の国家の王と違って、この三つの出来事によって、主なる神が、神の民イスラエルに対して御心にかなった王を建てたことを告げているわけです。

I サムエル記下 5 章 1～25 節の話の流れ。

本日の個所の話の流れを見てみましょう。5 章 1～3 節では、サウル家の後継者イシュ・ボシェトが死んだことをきっかけに、サウル王が支配していた北部のイスラエルがダビデを王としたということがいわれています。4～5 節では、ダビデがユダを統治した期間、そしてイスラエルとユダの全土を統治した期間がいられています。

6～10 節では、ダビデがエブス人の町エルサレムを攻略し、そこをダビデの町とし、王都にしたことがいられています。エルサレムは、北部のイスラエルの諸部族も、南のユダ族もベニヤミン族も攻略できませんでした。非常に堅固な要塞の町だったからです。そこをダビデが攻略し、北部イスラエルと南部ユダの中心においたわけです。

11～12 節では、ティルス王ヒラムがダビデに使節を派遣したことがいられています。新しく王となったダビデに対する表敬訪問でしょう。ダビデはヒラムと良好な外交関係を築くことができました。ヒラムはダビデの王宮建設をしています。これは、イスラエルの民は、これまで牧畜をしていましたから、王宮建設の知識や技術がまだなかったからでしょう。

続く 13～15 節では、エルサレムで生まれたダビデの子孫が紹介されています。全部で 11 人います。これは、12 節を具体的にいったものです。主がダビデをイスラエルの王として揺るぎないものとしたこと、王権を高めてくださったことを、多産によって示したわけです。

さて 17～25 節は、ペリシテ人との戦いの記事です。先にペリシテ軍はサウル王率いるイスラエル軍をギルボア山で打ち破りました。そこで新しく出来たダビデの王国にも攻め込んできたわけです。第一回の戦闘は 17～21 節でレファイムの谷が戦場となったようです。この戦いはダビデ王率いるイスラエルの勝利でした。続く 22～25 節は第二回の戦闘です。やはりレファイムの谷が戦場となりました。この結果、ダビデは、ゲバからゲゼルに至るまで、ペリシテ人を打ち滅ぼすことが出来ました。

以上を箇条書きにすると次のようになります。

1. 5 章 1～16 節 ダビデ、イスラエルとユダの王となる。

(1) 5 章 1～5 節 ダビデ、イスラエルとユダの全土の王となる。

(2) 5 章 6～10 節 ダビデ、エブス人の町エルサレムを攻略、そこを王都にする

(3) 5 章 11～12 節 ダビデ、ティルス王ヒラムと外交関係を結ぶ。ヒラム、ダビデの王宮を

建設する。

(4) 5 章 13～15 節 エルサレムで生まれたダビデの子供の一覧

2. 5 章 17～25 節 ダビデ、ペリシテ人を討ち破る。

(1) 5 章 17～21 節 第一回の戦闘。

(2) 5 章 22～25 節 第二回の戦闘。

II. サムエル記下 5 章 1～25 節の解説

【1～2 節】

実力者であった將軍アブネルも暗殺され、またサウル王の遺児イシュ・ボシエトが暗殺され、サウルの王国は終焉を迎えました。そこで「イスラエルの全部族はヘブロンのダビデのもとに」やって来ました。自分たちを統治する王がいなければ、いずれペリシテ軍の餌食になってしまう危険があったからでしょう。

そこでイスラエルの民は、まず「わたしたちはあなたの骨肉です」といっています。強い表現ですが、これは本当のことです。イスラエルもユダも、確かにヤコブの子孫であって兄弟なのです。

その上で、イスラエルの民は、「サウルがわたしたちの王であったときにも、イスラエルの進退の指揮をといっておられたのはあなたでした」といっています。これも事実です。すでにサムエル記上 18 章 7 節では、ペリシテ軍との戦いに勝利した際、人々は「サウルは千を討ち／ダビデは万を討った」と歌い交わしています。

こうして最後に「主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる』と。」そのようにいったわけです。これはとても重要です。イスラエルの民は、ダビデがサウルよりも強く優れているから王と認めたのではありません。信仰的に考えて、ダビデこそが自分たちの王であることを認めたのです。

そしてイスラエルの長老たちが全員、ダビデのもとに来て、契約を結び、油を注いで王としました。当初、ダビデはユダの王でしたから、さらにイスラエルの王でもあるという在り方でした。しかしそれは、直ちに、「イスラエルとユダの全土の王」と理解するようになりました。そのことは、4 節、5 節を見ると明らかです。ダビデは 40 年間王であったといっています。そして七年六か月の間ヘブロンでユダを統治し、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治したとあるとおりです。

このようにしてダビデは、世俗の王のように権力争いの末、王となったのではなく、まさに主なる神の導きによって、全イスラエルの統一王国の王となったのです。注目すべきは、こうした一連の記事には、ダビデの感想のようなことは何一つ語られていません。そのことによって、ダビデが王となったのは彼の成果ではなく、ただ主なる神の御業によって王とされたことが強調されています。ダビデが自分の喜びを表すのは、6 章にあるように、神の契約の箱をエルサレムに運び上げる時なのです。

【6～9 節】

さて王に即位したダビデは、王都をユダの中心地であったヘブロンからエルサレムに移します。エルサレムは、エブス人の町であり、ヨシュアの時代にも、士師の時代にも征服できなかった町です。したがって当時の人々は、無力感と共に、「どうして自分たちはエルサレムを攻略できないのだろうか」と考えたとしても不思議ではありません。その間に対する答えがここにあります。ダビ

デはそのエルサムを攻略し自分の町とし、北部イスラエルと南部ユダの中心地とするのです。

エブス人は、これまでの経験からダビデ王が攻め込んできても、町に入ることは出来ない和高をくくっていました。天然の要塞の町だったからです。そこでエブス人は「目の見えない者、足の不自由な者でも、お前を追い払うことは容易である」といって嘲りました。要するに戦闘能力の点で一番劣っている者ですら、ダビデを追い払うことができる、とっているわけです。エブス人は、これまでの誰も自分たちを攻略できなかったという過去に捕らわれています。そのためダビデが、主なる神の御心によって、全イスラエルの王となったという新しいことに気が付かなかったのです。

このシオンの要塞は難攻不落です。ところで要塞を維持するのに最大の問題は水です。雨水をためる貯水槽だけでは不十分です。この地域は雨期と乾期の二シーズンで降雨量が少ないのです。では一体どのように水を確保しているか。その点に注目すると、シオンの要塞の東のキドロンの谷のギホンの泉からトンネルを引いて水をくみ上げていることが分かりました。そこでダビデは「**水くみのトンネルを通過して町に入る**」よう命じました。そしてエブス人が先に、足の不自由な者や目の見えない者など一番弱い者でもダビデを追い払うことができると嘲ったので、ダビデは彼らを討ち、嘲ることができないようにしました。

尚、後に神殿が出来ると、この出来事のゆえに、目や足の不自由な者は神殿に入ってはならないといわれるようになります。つまりそこで見つめているのは、障がい者差別ではなく、エルサレム攻略の労苦を記憶した、ということです。

こうしてダビデは、エルサレムをダビデの町と呼んで、シオンの要害に住みました。そして「**ミロから内部まで、周囲に城壁を築いて**」、要害を強固にしたわけです。「ミロ」は、二列の石壁の間に土をいれて強化した壁のことです。それを一部だけでなく、要害の周囲にまで延長したわけです。このようにして王都を定めることができました。そのことについて、聖書は、「**ダビデは次第に勢力を増し、万軍の神、主は彼と共におられた**」と述べています。つまりここでも人間ダビデの権力ではなく、主なる神のダビデに対する守りを強調しているわけです。

さてそのようにダビデが全イスラエルの王となりエルサレムを王都に定めると、その噂は周囲の世界にまで広がったわけです。そこでティルス王ヒラムは使節をダビデの下に派遣しました。これは、サウルに代わってダビデが王となったので表敬訪問ということができます。しかしこれをきっかけにダビデとヒラムは良好な外交関係を築くことができましたようです。その結果、ヒラムはダビデの王宮を建設したわけです。ダビデたちイスラエルの民は、牧畜業と農業をしてきた者たちであって、王宮を建設する知恵や経験もなかったからでしょう。ダビデは、この王宮の完成を見て、主が彼をイスラエルの王として揺るぎないものとされたこと、また主の民イスラエルのために彼の王権を高めてくださったことを悟ったのです。何にしろ、イスラエルの歴史はじまって以来、初めての王宮だったからです。

【13～16 節】

ここでは、エルサレムで生まれたダビデの子供たち 11 名の名前が出てきます。前回とちがって妻や側女の名前はありません。それは、王宮の建設と共に、女性たちの住む後宮も出来たためではないかと思われます。以下に箇条書きにしてみます。

ヘブロン時代

①アムノン、②キルアブ、③アブサロム、④アドニヤ、⑤シェファトヤ、⑥イトレアム、

エルサレム時代

- ① シヤムア、② ショバブ、③ ナタン、④ ソロモン、⑤ イブハル、⑥ エリシュア、⑦ ネフェグ、
⑧ ヤフィア、⑨ エリシヤマ、⑩ エルヤダ、⑪ エリフェレト

ご覧のように、ヘブロン時代に比べるとほぼ二倍です。このような多産によってダビデに対する神の祝福を具体的に語ったわけです。

【17～25 節】

ここは、ダビデがペリシテ軍と戦ったという記事です。

ペリシテ軍は、サウル王率いるイスラエル軍をギルボア山で負かしたあと、引き続き侵攻してはいません。これは、サウル王の後継者をめぐっていわば内輪争いの趨勢を眺めていたということではないでしょうか。ペリシテ軍からすれば、いわゆる内輪争いでイスラエルが自滅していくことが一番望ましかったでしょう。

しかし事はそのように成りませんでした。ダビデは後継者争いのようなことはしませんでした。主なる神が導いてくださることを信頼し続けました。その結果、ダビデは全イスラエルの王となったのです。

そこでペリシテ軍は、早速、ダビデの王国に対して攻撃を仕掛けました。エルサレムの南西に広がるレファイムの谷に陣を敷きました。以前は、それよりもさらに西のエラの谷でイスラエルと戦っています。その時、ダビデとゴリアトの一騎打ちが行われたわけです。その時よりも、ペリシテ軍はさらに前進して攻め込んできたのです。

ダビデはサウル王とちがってきちんと主なる神に祈り、その御心を聞いています。主なる神はダビデに「**攻め上れ。必ずペリシテ人をあなたの手に渡す。**」とっています。これは、主なる神の戦いにダビデたちが参加するということを意味しました。そのことを証しするため、聖書は、ダビデ軍が「バアル・ベラツィム」に攻め入り、ペリシテ軍を討ち滅ぼした、とっています。したがって戦闘の様子を細かく語るのではなく、「**主は敵をわたしの前で、水が堤防を破るように打ち破ってくださった**」というダビデの信仰告白を記しています。ここから明らかのように、ペリシテ軍は壁のように戦列を組んでいたのですが、ダビデ軍の進撃の勢いが遥かに優っていたのです。

こうして「**ペリシテ人が自分たちの偶像をそこに捨てて行った**」と語り、万軍の主の勝利を明確に告げています。偶像であるからペリシテ人を助けることができません。だから捨てられたわけです。ダビデ軍はそれらの偶像を運び去ったわけです。つまり、いわばゴミ処理をするのと同じように廃棄処分にしたということです。

しかし再びペリシテ軍が攻めてきました。やはりレファイムの谷に陣をしいたのです。そこでダビデはこの時も主なる神に御心を求めました。すると今度は、前回と違って「**攻め上らず、背後に回れ**」というのです。そしてバルサムの茂みの背後から敵を攻撃するようにとっています。すなわち「**茂み越しに行軍の音を聞いたら、攻めかかれ。主がペリシテの陣営を討つために、お前に先んじて出陣されるのだ**」そのようにしています。つまり本隊とは別に遊撃隊を組織し、ペリシテ軍を背後ないし側面から攻撃するように、ということです。

ダビデはこのような主の御心に従って行動し勝利しました。人は成功体験からなかなか自由になれません。しかしダビデは神の御心にしがったので、自由に行動できたわけです。こうしてダビデは、「**ゲバからゲゼルに至るまで、ペリシテ人を討ち滅ぼした**」というのです。つまりペリシテ軍の東方侵攻作戦を壊滅させたのであり、彼らを本来の植民都市である地中海海岸平野のガザ、アシュケロン、アシュドト、エクロン、ガドに封じ込めたのです。